
暗がりと王さま

夕焼け

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗がりと王さま

【コード】

N2088N

【作者名】

夕焼け

【あらすじ】

王様は踊る。踊る。今日も明日も、裸で踊る。踊る。

「きみのことが好きだ」

「悪いけど自分はあなたを愛せそうにない」

「それでも、君をいつか振り向かせたい、努力をしたい」

「そういうのうざい。重いしめんどいからやめて」

「ごめんなさい」

「謝るくらいならもう電話してこないで」

「ごめんなさい」

「そのうじうじした感じがほんとうざい。きもい」

「ごめんなさい」

そういう体験を何度か重ねるうちに、欲しいものに手を伸ばすことが出来なくなつて、欲しいと思う事自体がなくなつていく。

いつも、暗がり歩いてる気分だ。

愛を知ってるかどうかで言うなら、多分知つてると言つて差し支えないと思う。

自分は多分、愛の色や形や味を知っている。

しかし自身の内側にもあるはずのそれを、現状正しく認識出来てるかと言えそうでない。

いとおしさだとか、怒りだとか、悲しみだとか、寂しさだとか、そんな感覚はもう随分前に認識不能な具合になってるし、ただ闇雲にぐにやぐにや膨らんだりしぼんだりする、意味不明な小宇宙だけがこの身の内には詰まってる。

誰の事も憎んじやいないけど、誰の事も愛してない。

それはそれとして、もう少し先まで行けば、今よりマシなどここに辿りつくだろう。

そんな風に考えて、歩みを進めるのだけど、風景は一向に変化しない。

繰り返される情景に、ただ飽食感が増すばかりだ。

どんな素晴らしくうまい高級料理も、毎日同じようなものを口にすれば、その味は食欲を正しく誘発する事が出来なくなる。

しかしそれは、これよりはまだいい。

食事は、愛の痛みを伴わない。

だからこれよりは、味に対する飽食のほうはまだいい。

痛み自体はもう消え失せてるのに、痛みに対する恐怖心だけが抜けない。

あの途方もない、いつ終わるとも知れない、一切の抵抗を許さない苦しみが再びこの身を焦がし尽くす事を考えると、情けなくも怯んでしまう。

元々が臆病な人間だった。

怪我を恐れて遊具で遊びたがらない子供だった。
衝突を恐れて、輪に混じりたがらない子供だった。

それでも周囲からせつつかれて、遊具で遊ぶようになれば、楽しそうな顔をする。

実際に楽しい気分になる。

でもある時滑り台から転げ落ちて、顎に怪我をして、それっきり遊具に興味を示さなくなった。

輪に対してもそうだ。

周りの助力を得て輪に加わってみるも、やはりそこには子供なりのパワーゲームが存在して、ゲームのルールすら分からない僕は当然一つの勝利もつかめない。

一つの勝利も掴めないものは、序列の最下層に配列される。
虐めるのに適した対象というやつだ。

多くの場合、虐めは理由があって執り行われるわけじゃない。

個が集まって、社会が形成されれば、そこに見えない序列が発生する。

その序列の最下位に位置するものは、常に何かしらのペナルティを受けける。

歴史がそれを証明してる。

黒人を隔離するアパルトヘイトが廃止されたって、えた・ひにん制度が廃止されたって、それは「最下層に位置する人々を、制度上の名前で区別して明記しなくなった」あるいは「序列を決める制度がより複雑化して、単一明快のルールに則ってそれを決める事がなくなった」というだけの事で「最下層」はいつ何時も、常にこの世界に存在してる。

無論、虐めの対象になった僕は、人に対して強い興味を抱かなくなつて、自分の内側の世界に居場所を探すことに躍起になった。それを見つけて、そこから出る事がなくなった。

幼い頃の僕にとって「友人」とは小説や漫画や妄想世界の中にだけ存在する生き物だった。

思い返してみれば、昔から著しく臆病だったし、心の弱さに強く依存した選択を、どんな場面でもしてきた。

そしてその選択は、その選択の性質に符合する未来を僕にもたらしただ。

僕は、僕を脅かすものがない、ただつまらないばかりの日常を、このようにして手にいれたのだ。

望んだものを手に入れたのだ。

この勝利を僕は誰にも譲るつもりはないし、僕はこの玉座に座り続けるだろう。

恐れるものは何もない。

僕は紛れも無く、冠を頭上に携えた王者なのだ。

いつも、暗がりを歩いてる気分だ。

物語の終わりを、時々つい望んでしまう。

強い感情じゃない。

ただ、つまらない映画を見ている時のように、はやく終わればいいな、と、そんな風に時々思ってしまう。

王様は、今日も序列の最下層の暗がりで、鋼で作られ、南京錠を施されたパンツ一枚を身にまとい徘徊を続けている。

1950年代を生きたビートルズの王が、かつてこんな名言を残した。

「真実よ、パンツを履くな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2088n/>

暗がりと王さま

2010年10月11日00時06分発行